

声

ぱらぱらはねとぶ、つぼと
バクテリアを

この声がふくむように

ことばには天気雨がまじりこんでいて

そのざわめきが

おとなり

とめようもなくわたっていく

誰がそこにいて

ここにいるのは誰なのか

かさなる波紋が

しずまらないこのむねに

いくども、たずねてきた

だけどたかなりを

かたい呼吸でおしかえせば

髪をきったみたいに

あかるくなる

いつのまにか

すっかり濡れてた

目をとじると

あの雲とおなじ速さではこぼれて

おだやかな声がきこえる

これは鼻で

これは頬、これは口

これはまぶた

祖父のかわいた指の感触が
ここにある

誰のどんな
蜂の巣を抱きしめても

ずっとそう

くやしがるのも

わらうのも

いかるのも、涙をながすのも
ずっと

この顔だ

水滴のついた

食料のビニール袋をねかせて

両手でぐっと窓をひきあげる

青い

空のたかさに

ゆれるバスケットゴールがみえる

まだおちつかない

背骨のしびれ

舗道で

はだしのきみと、すれちがった

小さくわめく鉄のゴミ箱

ダンク

息もつかず

ハイヒールをぶちこむきみの

不穏なまなざしが

とうとつに

雲間からさしこんでくる